

これがオススメ! 読み聞かせ本

低学年向き

学習指導要領で読み聞かせがすすめられて、読み聞かせについてのたくさん本が出版されています。また、ブックリストもたくさん出ていますが、さて実際に子どもたちに読もうと思うと、どの本がいいのか、どうやって読んであげたらいいのか、困ってしまいます。「これなら楽しく読み聞かせができるよ」という本と読み方を紹介しましょう。

犬は人間と共生を始めた最も古い家畜と言われ、高い共感力や癒しの能力を生かして多くの仕事をしてくれます。その中に、飼い主の耳や目の障害を助ける聴導犬や盲導犬などの介助犬がいます。さらに、共感力や癒しの能力で、高齢者施設や難病の子どもたちに寄り添うセラピードッグとして活躍する犬もいます。今回紹介する本は、日本ではまだ広く知られていない「図書館介助犬」のお話です。

図書館介助犬は、1999年に米国で始まったセラピードッグの一種です。読書に困難を抱える子どもが、この介助犬に本の読み聞かせをすることで、音読に対して自信がもてるようになると言われています。

介助犬の特別訓練を受ける犬の中には、保護犬もいるそうです。音読が苦手で、国語の時間

に緊張してうまく言葉が出ない子ども、吃音^{きつおん}のためつかえてくすくす笑われてしまった子どもに、介助犬はやさしく寄り添います。

この物語の主人公の女の子も、人前で本を読むのが苦手です。しかし図書館介助犬に出会い、人前で読む勇氣をもらいます。この本で図書館介助犬の存在を知った子どもたちは、物語に登場する、白くて大きなふわふわの犬をうらやましがり、「こんな犬に聞いてもらえたら、音読の宿題が毎日あってもいいな」などと、読み聞かせ後の感想を語ってくれました。

この本が、音読が苦手な子の気持ちを考えるきっかけになってほしいと思っています。犬とのふれあいから生まれる不思議な力を、ぜひ子どもたちと楽しんでください。



わたしのそばで きいていて

リサ・パップ作 菊田まりこ訳
WAVE 出版